

## 君がくれた時間

奄美市立赤木名小学校 五年 泊 愛永

七月も終わろうとする、ある日曜日、遊助は、公園の大きなガジュマルの木かげにねそべりながらマンガを読んでいました。外の暑さはきびしいけど、お気に入りのこの木かげには時々、ひんやりとした風が吹いてきて心地いいのです。公園には、真っ赤なハイビスカスの花やフリルがいつぱいあった洋服を身にまとっているようなサルスベリのピントクの花が親しげにゆれています。ここで風を感じる時間が大好きな遊助は今日もまた、うたたねをしました。すると、どこからかだれかの話し声が聞こえてきました。

「この子、またここでいねむりしているよ。」

「この子にあれを相談してみようか。」

「だめだよ、この子、人間だよ。」

「人間の子だから、いいんじゃない。」

「そうか、人間の子ならきつとあの灰色ウサギに勝てる知恵を持っているにちがいないわ。」

そんなひそひそ話が聞こえてきたので遊助は、そつとす目を開けてみました。すると何びきかのク

ロウサギが遊助をとりまいて話し合っているところでした。

その中の一ぴきが遊助に気づいて声を上げました。

「あ、目を覚ましたみたいよ。」

「こんにちは、ぼく、遊助。ここはどこ。」

遊助がたずねると、リーダーらしいクロウサギが答えました。

「ウサギ広場よ。おいしい草がたくさんあって、ハブやマングースもないの。私たちクロウサギにとつては天国みたいな所なの。でも……。」

「でも？」

遊助が不思議そうな顔を見ると、クロウサギは心配そうな顔で話をしました。それは、灰色ウサギのことでした。灰色ウサギは体がとても大きくていつていました。けんかをしてもとうてい勝てる相手ではありません。そして、働くのがめんどろになる。と灰色ウサギはいつもクロウサギに、

「しいの実をたくさん拾ってこい。」

とか、

「ススキを取ってこい。」  
などと言いつけるのでした。クロウサギたちは、灰色ウサギがこわいので仕方なく言われたとおりに

したがっていました。でも灰色ウサギの意地悪はひどくなるばかりでした。そしてついに、こんな注文までつけるようになりました。

「昼間が暑くてたまらない。一日だけでもいいから昼間の太陽をかくして夜にしる。それができないなら、この山から出て行け。」

クロウサギたちは、頭をかかえてなやみました。

「昼を夜にしるだって。」

「そんなことできるもんか。」

「でも、どうにかしないと、この山から出て行かされるよ。」

考えても考えても、いいアイディアは見つかりません。そして時間だけがどんどん過ぎていききました。そんな時、遊助を見かけたので、とうとう、遊助に相談したのでした。

遊助は、しばらく考えていましたが、ふと思いついたように言いました。

「今日は何日？」

「平成二十一年七月十五日だけど。」

リーダーのクロウサギが答えました。

「ふうん、ぼくらの世界より一週間おくられているんだ。」

遊助は、心の中でつぶやいてから、クロウサギにこ

う言いました。

「では、『今日から一週間経った日の昼を夜にしてみせる。』って灰色ウサギに言ってきてもらえん。」

ちようどそのころ灰色ウサギは、自分の無理な注文にあわてているクロウサギの様子を思い浮かべては大笑いしていました。

「いくら考えても昼を夜にするなんてできっこないさ。へっへっへ。」

ところが、一週間後の午前十一時頃、とつ然、明るかった空が暗くなり、夜になりました。こんなことが起きるわけがないと思っていた灰色ウサギは、大あわて。おそろしくなって、

「クロウサギは、不思議な力を持っているかもしれない。これまでだって、かなり無理なこともやってのけた。こりゃあ、うっかりすると大変なことになるかもしれない。」

と反省するのでした。

それからの灰色ウサギは無理なことを言うのをやめてクロウサギにやさしくなりました。

「おい、おい遊助。」

遠くから聞こえる声で、遊助は目を覚ましました。友だちのつるの君の声でした。

「また、ねてたのかい。早く野球をしにいこうよ。」  
「よし、そうしようか。」  
「それにしても、この前の皆既日食、すごかったよな。本当に昼が夜みたいになっちゃったもん。きつと動物たちはぼくたち以上にびっくりしたかもね。」  
「きつと、そうさ。特に灰色ウサギはね。」  
「え、灰色ウサギって何？」  
「いや、なんでもない。さあ、野球しよう。」  
遊助はいたずらっぽく笑うと走り出していきました。

